

日本社会の病理と オウム真理教

◎カルト集団にかんする記号論的考察

Setagawa Masahiro

瀬田川昌裕



瀬田川昌裕 (せたがわまさひろ)

1952年、秋田県に生まれる。74年、日本大学法学部政治経済学科卒業。

'79年、日本大学大学院法学研究科博士後期課程公法学専攻満期退学。

現在、秋田経済法科大学法学部助教授。研究テーマは法社会学、現代思想。記号論を用いて法と社会・文化・思想を総合的に考察することを目標としている。また、宗教現象と一般社会・文化との接点に大いなる関心をもつ。既出論文に「記号論から見た犯罪現象」「フランス社会学の系譜」他がある。

日本社会の病理とオウム真理教

——カルト集団にかんする記号論的考察——

1997年3月20日 初版第1刷発行

著者 瀬田川昌裕

発行者 上原雅雪

発行所 (有)白順社

東京都文京区本郷4-9-14

電話03(3818)4759 振替/00130-9-134642

印刷所 (株)文昇堂

平河工業社 [カバー]

製本所 (株)フリオール

©1997 Masahiro Setagawa

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8344-0045-X C0036

112
B99
192

日本社会の病理と オウム真理教

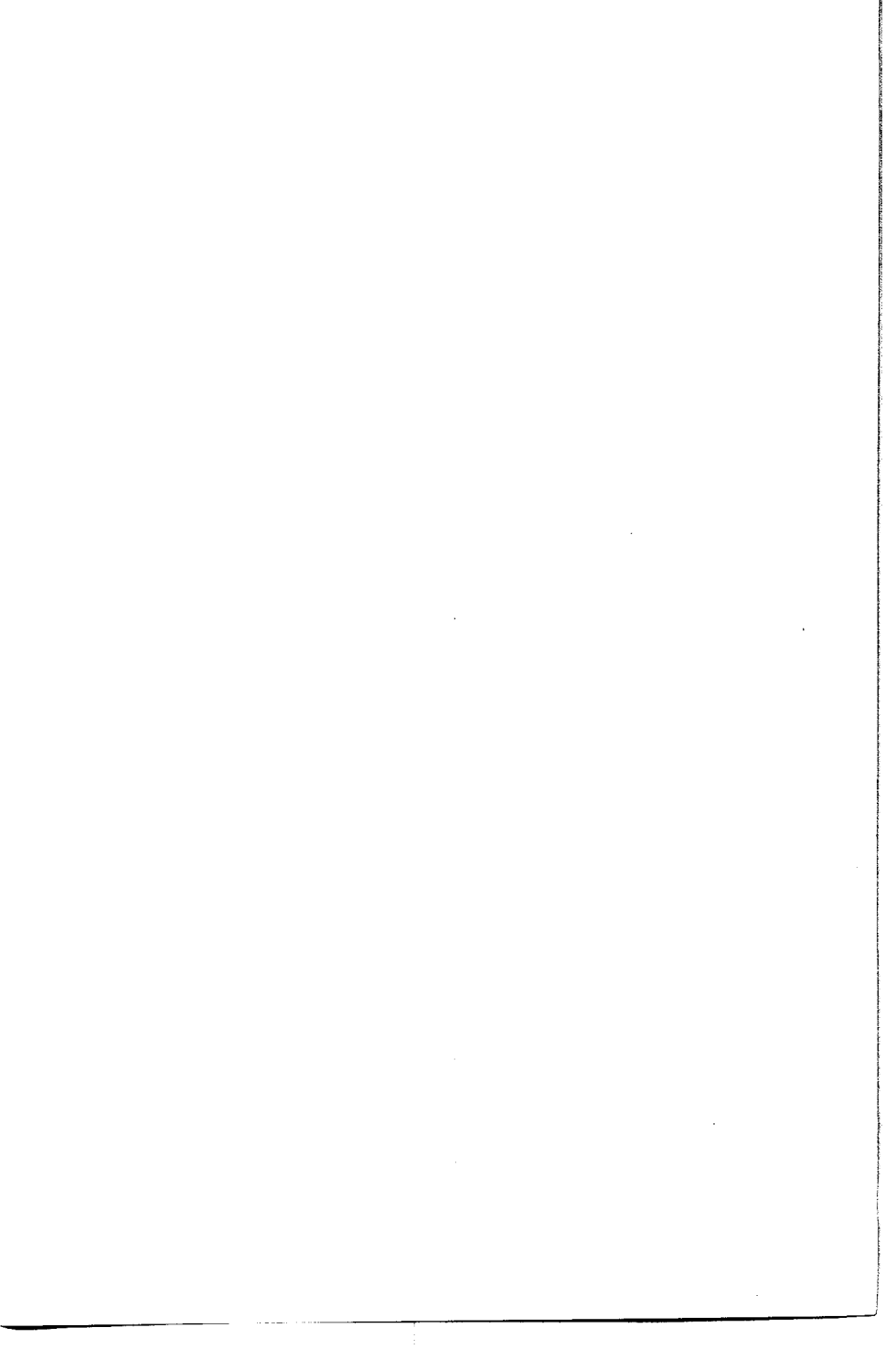
●カルト集団にかんする記号論的考察

Setagawa Masahiro

瀬田川昌裕



白順社



日本社会の病理とオウム真理教「カルト集団」にかんする記号論的考察

本書を亡き父、瀬田川八十二に捧ぐ。

プロローグ

オウム真理教が問いかけたもの

一九九五年三月二十日、午前八時、事件は、満員の通勤客を乗せて都心にむかう地下鉄のなかで発生した。いずれも「霞が関」駅に停車する五本の地下鉄である。

満員の車内で発散した毒ガスは、容赦なく乗客を襲った。目と口を押さえながら、出口に向かう乗客たち。そのかたわらには、胸をかきむしりながらこと切れていった人々の遺体があった。このとき使用された毒ガスは、後にサリンと断定された。死者十一名、被害者五千五百余名を数えた未曾有のテロ事件は、しかし、「始まり」にすぎなかつた。

地下鉄サリン事件をはじめとする一連の事件は、オウム真理教というカルト教団の組織的犯行であつたことが明らかになりつつある。この事件は、現代に生きる私たちに対して衝撃を与えたが、

事件の評価や原因の分析は、人によりさまざまであった。

最初に現われたのは、一連の事件の原因を、教祖の精神の異常性に帰する意見であった。しかし、仮りに教祖が精神異常者だとしても、その教祖に、人生のすべてをかけた人たちが数千の単位で存在したという事実、そして、現在もなお少数ではあるが出家行者として修行に励んでいる事実を、どう考えたらいいのか。社会全体から白眼視されながらそれだけの人間が集まったという現象を、教祖の「精神異常」だけで片づけることはできないであろう。

また、教祖は詐欺師であり、信者はみなマインド・コントロールにかかっていると主張する意見もあった。オウム教団がマインド・コントロールや洗脳を行っていたのは事実であろう。しかし、そのことだけですべてを説明することもできない。そのほかに、勧善懲悪の立場からこの事件を見る人々もいたが、おそらく彼らは、自己の正義感を満足させただけで終わってしまったにちがいない。

事件に対する世間の関心そのものが沈静化した今日、私たちは、あらゆる偏見を捨てて、もう一度、虚心担懐に、「オウム真理教」という宗教団体と向かいあわなければならないと思う。

なぜなら、本書で論述するように、今回の一連の事件とオウム真理教をめぐる問題は、まさしく日本の「いま」という時代を反映しているのであり、特殊で例外的なものでは決してないからである。宗教上の問題も考察されなければならないが、私はむしろ、オウムと現代社会の相似性について注目したい。

冷静になって考えてみれば、オウム真理教のやっていたことは、多かれ少なかれ、「日本」という国家と社会が国民に対してやってきたことでもある。たとえば、ある企業は猛烈な企業戦士を作るために、新入社員にたいして「みそぎ研修」とか「死の特訓」を行ない、閉鎖的な状況をつくりだして不眠不休の特訓をし、精神を極限状態にまで追い詰め、会社のためには死をもいとわぬ企業戦士を育成している。これとオウムと、いったいどこが違うのであろうか。

「日本」という国家と社会を、外から眺めてみれば、「日本」それ自体がひとつのカルト社会のようには私には思えてくる。やはり、この事件は、文明論的な文脈のなかで明らかにされるべきものであろう。

オウム真理教という宗教団体は、決して偶然に出現したのではない。それは、日本社会の縮図であり雛型である。信者や元信者たちの話を聞いてみて、彼らの社会に対する批判と宗教に対する考えに共感を覚えるところも少なくない。彼らは、真剣に人生と社会を考えたがゆえに、オウム真理教にとり込まれたのである。彼らのたどった道を「私がつたかもしれない道」であるという森岡正博のとるスタンスに、私も同意する。私もまた、〈私〉という主体との関係のなかで、「オウム」という社会現象を〈わがこと〉として考えてみたいと思うからである。

オウムを分析するための方法Ⅱ記号論

本文に入るまえに、まず、ここで記号論について簡単に述べておきたい。

言語の特質を考えると、言語とは単に伝達の道具ではなく、社会の一切の意味作用を担うものであることに気がつく。そうすると、われわれは、言語もしくは広い意味での記号を分析することによって、意味作用としての社会現象の構造をとらえることができるのではないか。記号論は、こういう発想から生まれた。

たとえば、ソシユールは「一般言語学講義」のなかで、つぎのように述べている。

「言語は一つの社会制度であるが、これはいくつかの特徴によって他の政治制度、法律制度などとは趣をことにする。その特殊的性質を理解するには、新たな秩序の事実をもちださねばならない。

……そこで、社会生活のさなかにおける記号の生（引用者注、原文では *écrit* すなわち生命や生活を示す言葉）を研究するような科学を想像してみることができる。それは社会心理学の一部門をなすであらう。われわれはこれを記号学（*semiologie*、ギリシヤ語の *semeion* 「記号」から）とよぼうとおもう。」

ソシユールは、記号を、「意味するもの」（シニフィアン）と「意味されるもの」（シニフィエ）との結合としてとらえる。前者が「表現」であるとしたら、後者は「表現内容」である。⁽³⁾

例をあげるならば、ここにバラの花があったとしよう。「バラ」というモノの記号は、「意味するもの」としては音韻記号としての〈バラ〉である。そして「意味されるもの」として、それは〈植物の花〉である。これはあくまで記号の表面的な意味である（記号論では、これを外示的意義 [denotation] とよぶ）。この「バラ」という記号を、文化的な文脈（コンテキスト）に入れると、特有

の文化的意味を示してくるのである。

たとえば、小説や演劇においては、バラは「愛」の象徴として扱われることになる。男性が女性にバラの花束を送るということは、そこに愛情が示されているということになる。また、フランスの政治の世界においては、バラは「社会党」のシンボルになる。一九九三年三月二十一日の選挙で社会党が大敗したとき、ある新聞は、ミッテラン大統領を「バラの花にしがみついている」と表現した。この表現は、記号における文化の深層の意味をあらわしている（これを記号論では内示的意義あるいは共示的意義 [connotation] とよぶ⁽⁴⁾）。

このように、記号論は、表層的な意味を超えて、現象の背後に隠された深層的な意味に迫るための方法であるといえる。

文明が一つの象徴体系であり、記号の体系であるとするならば、そこには言語の有する一般的な特性である恣意性と示差性が存在すると仮定することができる。技術、生産、消費、権力、政治、法などに代表される文化の諸形態は、〈意味〉の表現形態であり、その文明を成立させている究極の存在は、〈意味されるもの〉である。〈オウム〉という社会現象もまた、文化の一形態であるならば、その背後には日本社会の究極的な〈意味〉や〈価値〉が隠されているはずである。本書では、このような記号論の方法を使用して〈オウム〉という社会現象を分析していきたいと思う。

なお、本書は二部構成をとり、第一部ではオウム真理教団と現代社会の構造を比較し、第二部で

はオウム事件を通して現代ニッポンの病巣にメスを入れてみた。もちろん、それぞれは同一テーマのもとに関連しており、互いに他を補完しあうかたちになっているが、いまの段階では試論といふべきものである。したがって本書をお読みくださるかたは、ご自身が最も興味ある部分から読み始めていただきたい。そして、気がついたときには全体を読み終えていた、ということになれば、著者としてこれ以上の喜びはない。

オウム真理教にかんする研究は始まったばかりである。社会科学の研究対象として、この事件全体を統一的・体系的にまとめ上げる作業は、オウム事件の今後の裁判の進展をまっけて、他日に期することとしたい。

- (1) 森岡正博『宗教なき時代を生きるために』法蔵館、一九九六年、参照。
- (2) フェルデナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』岩波書店、一九七二年、二九ページ。
- (3) 同、九六―九七ページ。
- (4) 池上嘉彦他『文化記号論への招待』有斐閣、一九八三年、二二―三二ページ。

日本社会の病理とオウム真理教／目次

第一部 記号論で読み解くオウム真理教

1 オウム真理教団の構造とその機能 17

2 現代の日本社会とオウム真理教 49

3 カルト集団の支配構造 85

4 洗脳とマインド・コントロール 103

5 プロフェッションの職業倫理とオウム事件 142

第二部 オウム事件と現代日本社会

1 病めるマスコミのオウム報道 161

2	なぜ仏教団体は沈黙しているのか	174
3	天皇制とオウム真理教	190
4	オウム食の人間学	201
5	オウムの反ユダヤ主義について	213
6	「犯罪」という記号の消費	219
7	法はカルト集団に対抗できるか	228
	エピソード (カルト社会ニッポンの没落)	237
	あとがき	245



第一部 記号論で読み解くオウム真理教